

KSKQ どかどか No.297

ぽぽんがぽん news



笑顔あふれ つながりあえる社会へ

～ひとりひとりが自分らしく生きてゆけるために～



一九九二年九月三日 第三種郵便物承認 毎月(1・2・3・5・6・8の日)発行

本年1月1日に石川県能登地方において大きな地震が発生し多くの方が犠牲となり、今もなお避難生活を余儀なくされている多くの方々がいらっやいます。改めて犠牲になられた方々のご冥福をお祈りいたします。

現地支援に入っていた他法人役員さんを通じて、現地の支援員さん達の「BCPなんて、絵に描いた餅、被災した瞬間に思い出せないし、読み返している時間もない、それよりもまず「動くこと」が最優先だ」という声が聞こえてきました。それほど想定を超える激甚災害となっていることを強く感じました。本通信では、そこで思い出されたこと、考えたことなどを少し書きたいと思います。

東日本大震災後に受講した研修で、激甚災害のときはマニュアルに書かれている「正解」が通用しないことのほうが多く、そんなとき大切になるのは議論を重ねつつ暫定的に納得する結論としての「成解」なのだということでした。その場を共有する皆で「成解」を導き出そうとする過程が、その場を共有するすべての人の力の源泉となるものを生み出すのではないだろうか、と言われていました。

この考えが支援においても通じるものであることを、以前にぽぽんがぽんでもコンサルテーションをいただいた現兵庫県立大学の竹端寛准教授が書かれていた文章を紹介します。

「正解」と対置した「成解」概念。ローカルな文脈という空間限定・依存的で、かつその時に求められるという時間限定的な制約を持つ。だが、その中で「当面成立可能で受容可能」で、その現場を変えうる力を持つ「解」としての「成解」。福祉現場で求められる知は、この意味での「成解」ばかりである。教科書的知識や専門職の思い込み・

押しつけを外在的に押し付けた「正解」では、現場が大混乱する可能性は高いが、そのメガネですっきり課題が解決する可能性は、まずない。それほど、対人直接支援の課題は、文脈依存的なのである。

対人支援においても災害BCPにおいても、マニュアル作成だけにとどまることなく、「成解」を導き出す力を養うためのシミュレーションや対話の機会が大切になっていくと考えています。年々事業としての規制や基準が厳しくなっていく中で、いかに職員や当事者との対話の時間と質を確保していけるかが重要になっていくと考えています。(事務局 水野昌和)

内容

- 成解
- きょうのNANIKA
- 考える会シンポジウム
- なんでそんな大賞W受賞!!
- ぽぽんがぽんエッセイ
- ろくちゃんまちをゆく
- スタッフ紹介/寄付金等のお礼
- 編集後記



きょうのNANIKA

014

生活介護事業所ぼかぼか・どかどかに通う利用者さんの取り組みのなかで、
 私たち支援スタッフや、利用者さん同士が「何かすごい」「何か良いなあ…」と感じた「何か」。
 名前をつけたり説明してしまう前に、まず色んな人に見て欲しい、
 そして一緒に考えられたら良いと思います。



高原さんは、ひとつひとつの行動をとっても丁寧にされる方です。
 また、色々な事にとっても気を配っていて、たとえば「この机と机の間を通った人が、次にどこを通ってもとの席に戻るか」という
 こともしっかり見ておられます。高原さんのぼかぼかでの
 過ごしは、こういう、ひとつひとつの細かなことの積み
 重ねのように見えます。高原さんのペースや、安心
 できる流れのようなものがあって、スタッフは
 それをできるだけ把握しながら関わりをして
 います。

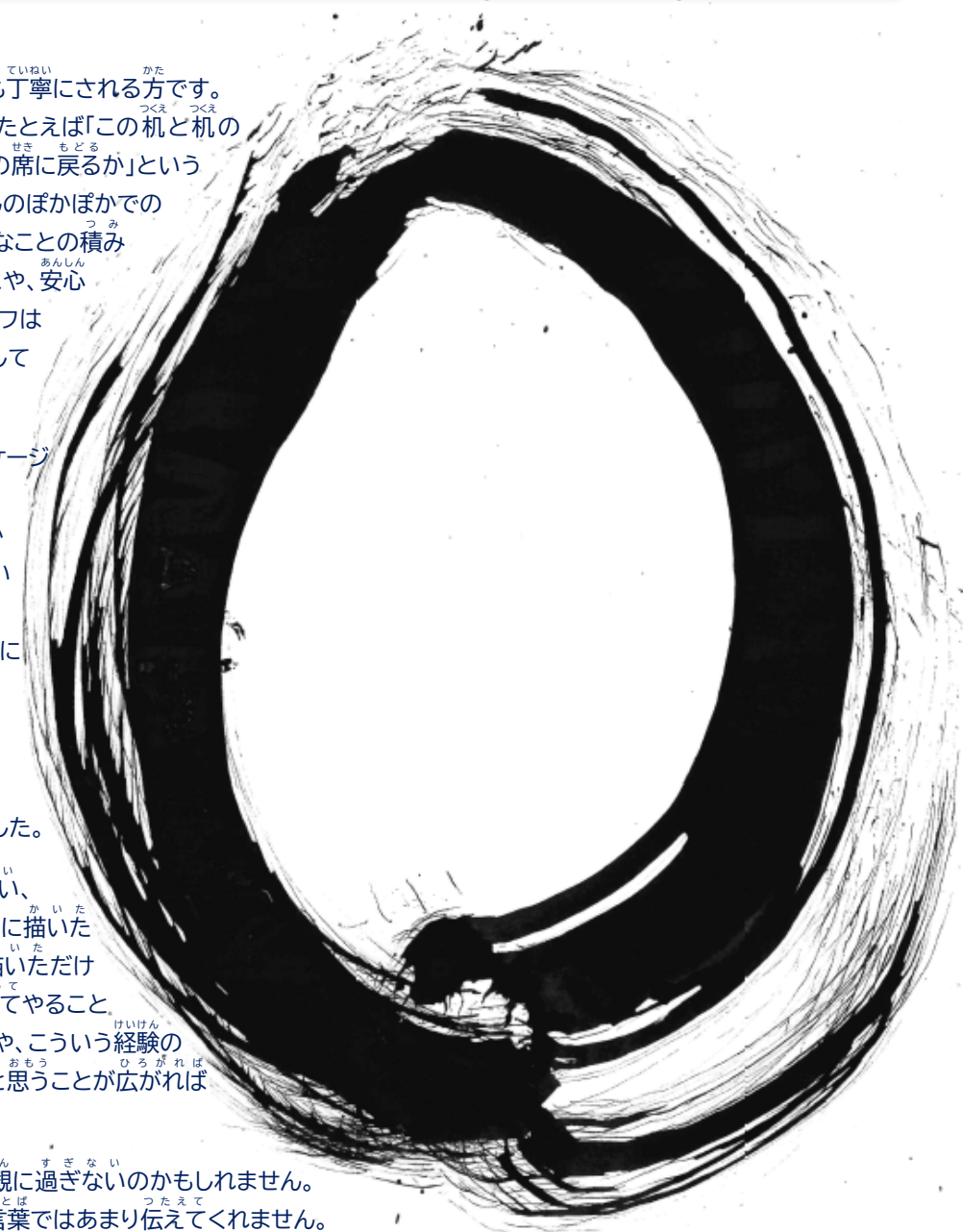
ぼかぼかの商品「アクリルたわし」のパッケージ
 変更を検討するなかで、アクリルたわしの
 形に合ったデザインのもの…あ、何種類か
 「○」を描いてもらったらいいかもしれない
 と考え、そうだ、今年の書き初めで良い
 表情をしていた(ように見えた)高原さんに
 お願いしてみたい、と思いました。

この紙に、○を描いてくれませんか、と
 お願いして道具を見てもらうと、「描く」と
 言われて6枚の「○」を描いてくださいました。

この「○」、なんというか、自分には描けない、
 すごい「○」です。でも、高原さんが自発的に描いた
 ものではありません。お願いされたから描いただけ
 です。やっぱり本人自ら「やりたい」と思ってやること
 でないといけないんじゃないか？いやいや、こういう経験の
 なかから、高原さんが自分で「やりたい」と思うことが広がれば
 いいのでは？

広がればいいというのは、支援者の価値観に過ぎないかもしれません。
 高原さんは、自分の気持ちを「こうだ」と言葉ではあまり伝えてくれません。
 高原さんの気持ちは、高原さんのリアクションや、表情や、行動からおしはかるしかありません。

ぼかぼかでの高原さんとの関わりには、ためらいや、葛藤がつきまといます。答えが出せません。
 でも、考え続けながら関わっていくことに、何か意味があるのかもしれない、と思っています。



(題字：林裕之さん 文：山根康純)

2023年度 知的障害のある人の自立生活を考える会
オンラインシンポジウムにパネラーとして参加しました。



映画「道草」との出会い

2019年道草の上映をきっかけに、ぼぼんがぼんがこれまで地道に取り組んできた、知的障害がい者の自立生活支援にスポットがあたることになった。

・道草の記事が読売新聞に掲載された際、ぼぼんがぼんの自立生活取り組みが紹介される。

・大阪での上映時、舞台挨拶に自立生活をしている奥原さえ子さんとその仲間(ヘルパー)たち登壇

・NHK Eテレ「バリバラ」にも取り上げられ奥原さんとスタジオ出演

・東京家政大学教授田中恵美子さんからインタビュー(ぼぼんがぼんの知的自立取り組みについて冊子に掲載される。)

・ぼぼんがぼんの相談支援も企画に関わり、茨木市障害者地域

自立支援協議会で道草の上映、上映後には早稲田大学教授岡部耕典さん

の講演、トークショーにはぼぼんがぼん田井英一郎もグッドライフの末永さん

たちと登壇

・2020年2月2日ぼぼんがぼんでも道草上映会を開催(確かコロナ拡大前でぎりぎり開催できた記憶あり。)



「知的障害者の自立生活に関する声明文プロジェクト」との出会い

このような経緯から 2019年12月21日に開催された「地域で暮らす」を知る、考える、

ひろげる～重度知的障害者と呼ばれる人たちと仲間の実践から～にパ

ネラーとして声をかけていただき、声明文プロジェクトのみなさんとつ

ながることになった。(ぼくの登壇したパネルディスカッションの前段に

は、映画「道草」上映&トーク 対談: 宍戸大祐(映画「道草」監督)×

立岩真也(立命館大学教授)という貴重な会であった。)



「知的障害のある人の自立生活について考える会」への参画

その後、社会はコロナ禍に入り、オンラインでの集まりが主となるなか、

「声明文プロジェクト」が発展して「知的障害のある人の自立生活に

ついて考える会」となり、ぼくも運営委員に加わることとなった。

オンラインサロンやオンラインシンポジウムの定期開催、フェイスブック

グループの取り組みを継続して取り組んできている。



「知的障害のある人の自立生活について考える」
 2024年2月23日(金・祝) 13時30分〜16時00分・オンライン配信(ZOOMウェビナー)
 主催 | 日本知的障害者福祉協会(JAID) | 共催 | 日本知的障害者福祉協会(JAID) | 協賛 | 日本知的障害者福祉協会(JAID)
 申込先 | info@jaid.or.jp | 申込期間 | 2024年2月15日(木)18時00分〜2024年2月22日(木)18時00分
 申込費 | 無料 | 申込人数 | 100名程度 | 申込締切 | 2024年2月22日(木)18時00分
 申込URL | <https://www.jaid.or.jp/sympo2024/>

第1部 | 13:40 - 14:20 | 基調講演「ひとまず、ここで来たぞ! 地域での知的障害のある人の自立生活」
 講師 | 田中真実子 (東京家政大学)
 内容 | 知的障害のある人の自立生活の歴史的変遷について、また、今年度実施した全国の自立生活実証調査から見た地域での生活や就業、課題や可能性について、そして、知的障害のある人の自立生活について考える会へのつながり、今後の思い。

第2部 | 14:30 - 16:00 | パネルディスカッション「関係者が関る—これぞこれか!」
 登壇 | 中村和洋 (NPO法人 東京2020)、藤原誠人 (NPO法人 ぽんぽん)、林廣美 (社会福祉法人 泉光苑)、太田吾郎 (社会福祉法人 | ぽんぽんがぼん)
 コーディネーター | 市川彩 (自立生活支援センター)、田中真実子 (東京家政大学)
 コメンテーター | 新井智 (自立生活センター | 小学)
 内容 | パネルから、知的障害のある人の地域での生活の実現経緯、出会いや関係となった出来事、実践に欠かせないを話し、そこから今後の展望や期待、課題などクロスアップを議論。

申し込み先 | <https://www.jaid.or.jp/sympo2024/>
 申し込み先 | <https://www.jaid.or.jp/sympo2024/>

さて、前置きが長くなったが、ここからが本題となる。

2024年2月23日「知的障害のある人の自立生活について考える会」2023年度オンラインシンポジウムにパネラーとして参加させていただいた。

オンライン配信ではあるが、登壇者や運営委員は、東京麻布十番のスタジオに集合することになり終了後作戦会議をすることになった。

東京に行くときはいつも誰かがガイドをしてくれていたけど、では、まず一人で東京に行って泊めて帰ってくるのが大仕事であつたのだが、その話は置いておく。

詳細は後日配信されるだろうYouTubeを見てほしいが、ここでは当日のぼくの発言を一部掲載したい。

「今日は自立生活という話ですが、グループホームとどう違うのかという話だが、イメージをしてほしい。

健全者といわれる人たち、自分がグループホームに入るイメージをしてほしい。

例えば、4人のグループホーム、4人の職場の同僚や友達、まったく見知らぬ人4人が突然集められて1つの所に住むのです。

これは実際住んだらそこには、人間関係の編み目ができて、仲良くなったり、良い人間関係ができることもある。

そこには、入居者同士の関係がかけがえのない貴重なつながりができることもある。

多くの人はそういう場面をみて、グループホームは知的障害の人にとって良いところだ、本当に知的障害の人は一人暮らしがしたいのかと言われます。

一方で、グループホームで気が合わない人もいたりする、その場合、そこから出て行けない。

そこにずっと関係が良くても悪くてもいなくてはいけなくて、選択ができない。

そこで重度訪問介護が使えるれば、そこに住みたくなければ、そこから出て行ける。

重度訪問介護を一人暮らしの制度と考える必要はない。

重度訪問介護を使って自分の住みたい人と住むこともできます。

その人一人ひとりが決めて、自分の生活を定めるためには、最低限、重度訪問介護の制度が必要だ。

なぜ自立生活なのかということを知りたいと思う。」

今回のオンラインシンポジウムを契機に、全国で、大阪で、茨木市で知的障害のある人の自立生活をひろげるために、

もっと頑張りたいと思う。

(太田吾郎)

<ぼぼんがぼんエッセイ>

「姉の事」

私事ですが、一昨年、姉が四十七歳で亡くなりました。

十二指腸の悪性腫瘍で、かなり進行が進んでおり、またコロナ禍という事もあって、治療もままならないまま一昨年の七月に永眠しました。

姉に対して、まだ若いのにという思いや、もう少し早く検査ができていたら、という後悔は当然あるのですが、一方で姉は、自分の人生を生き切ったのだとも思いました。

もちろん最初はそんな風には思えなかったのですが、葬儀を一通り終え、姉の部屋を片付けていた際、様々な資料や記録を見つけ、姉が辿った足跡を知る中で少しずつそのような考えに至りました。

姉は大阪市内の特許事務所に勤めており、翻訳関係の仕事に携わる傍ら、ボランティアで留学生を対象に日本語の家庭教師や通訳も行っていました。

家庭教師の生徒から何通も手紙が届いていて、姉が彼らの就職面接等の相談にも親身に乘っていた様子も聞きました。

職場はそれほど大きくなく仕事も忙しいという話は生前姉から聞いていたので、休みの日にボランティア活動に時間を割くのは大変だったと思います。ですが、自分がやりたい事、正しいと思うことのために活動していたことは、彼女にとって自分の人生を生きるという意味そのものだったのだと感じました。

もちろん四十代の若さで亡くなる事は姉にとって本位ではなかったと思いますし、成し遂げたい夢や叶えたい理想は他にもたくさんあったのだと思います。

そういった意味では病気により思い通りにならなかった事も多く、後悔もあったかもしれませんが、にもかかわらず、姉が生きた意味はあったのだと理解しています。

困っている人のために何かをやりたい、力になりたいという思いは、理屈ではなく昔から姉がずっと持っていた資質のようなものでした。

そのために活動する事で自分に無理を強いていた面も少なからずあったとは思いますが、自身の資質に従い、正しいと信じる事、つづけ、結果として周りの人たちの支えになった事は、彼女の人生において大きな達成の一つだと思っています。

生きている間、何かを十全に成し遂げられなかったとしても、道半ばであったとしても、本質的にそれはあまり重要ではない。大事なのは自分の人生を生き切る事であり、その意味で姉は確かに自分の人生を全うしたのだと、そう思っています。

翻って、自分が仕事に携わっている時にも、同じ事を感じる事があります。

利用者の方は、行きたい場所に出かけられたり、やりたい事ができた時、心から嬉しそうな表情をされるのですが、その姿を間近で見るたびに思っています。

障がいの有無や社会的な影響力に関わらず、その人がその人らしく生きる中にこそ人生の喜びや幸せがあるのだと。

そしてまた、自分たちが支援者である限り、その人の小さな喜びや気づきに寄り添う事を、何よりも大切にしたいと思っています。(田井英一郎)



ろくちゃんまちをゆく NO.105



こんにちは、2023年7月号で、2022年5月に実施したトヨタ自動車の車両であるJapanタクシーの検証会についての記事を掲載させていただきました。その後、2023年12月にJapanタクシーと異なる車両で、シエンタ、ヴォクシーとJapanタクシーの車両比較とその後トヨタ自動車との意見交換会を実施しました。参加者は、近畿分科会の委員、当事者、学識、トヨタ自動車株式会社、行政職員を合わせると48名となります。

車両の特徴として、シエンタ、ヴォクシーは、後方からスロープ板が出てきて、車椅子で乗車できます。また、シエンタは乗用車タイプでヴォクシーはワゴンボックス型で大きいタイプです。Japanタクシーは横から、スロープ板を設置して車椅子で乗車ができます。



シエンタ



ヴォクシー

乗車しての感想は、シエンタ、ヴォクシーはスロープ板が、そのまま出てくるので、設置の手間がなく車内へスムーズにいけて、方向転回がしなくて快適です。さらにヴォクシーは車内が広めなので、車窓からの景色は良く見えます。シエンタの場合は車内が狭いため、私の電動車椅子ではギリギリでした。Japanタクシーは、横からスロープ設置して、車内で方向転回しますが、私の電動車椅子は、大きいため方向転回ができませんでした。

課題としては、シエンタ、ヴォクシーについて、スロープの耐荷重が介助者込みで200kgまでとなっており、車椅子でリクライニングなど装備品を合わせると200kgこえてしまい、せめて300kgまで耐久力のあるスロープがあればと思いました。Japanタクシーについては、車椅子で車内での方向転回がしやすくなればと思いました。タクシー協会さんが参加され、Japanタクシーでスロープ板の取り付け方に時間がかかり、簡略できればという意見がありました。トヨタ自動車には、車両の検証会や意見交換会を踏まえて、車両のリニューアルの時に改善してもらえればと思いました。その為には、引き続き意見交換会などを踏まえて取り組んでいきたいです。(六條友聡)



Japanタクシー



スタッフ紹介 ヘルパー派遣部門

こんにちは。ヘルパー派遣部門の水上有加です。わたしは、学生時代にぼぼんがぼんと出会い、11年程が経ちました。
ぼぼんがぼんでは、利用者の方と色々なところにお出かけしたり、居宅での支援をしたりと、日々様々な発見等もあり、いろんなことを経験させていただいています。

コロナも完全には言いませんが、少しずつ色々な方にお出かけを再開はじめているのを身近に感じ、楽しそうな表情をみることに嬉しさを感じています。気を付けつつではありますが、みなさんと一緒にお出かけできるのを楽しみにしています。



また、プライベートでは基本的にはインドアで、アニメやゲームを観ることが多いのですが、季節ごとの景色(花など)を見に行くことや、音楽が好きでライブやフェスに行くのが好きです。ライブでは、時々遠征もして、その土地の美味しい食べ物を食べることも楽しみの一つになっています。
仕事もプライベートも楽しみつつ、頑張っていきたいと思うので、これからもよろしくお願いたします。



ご支援、ご寄付、ご提供ありがとうございます！
2023年12月8日～2024年2月20日まで(順不同)

郵便振替の都合上、お名前が反映できていない場合は上記期間に限らず掲載させていただきます。ご了承ください。



社会福祉法人ぼぼんがぼんへご寄付ありがとうございました
新井様 金田様 長島様 岸本様 原田様 匿名の皆様

つながりの会ぼぼんがぼん(後援会)へのご寄付ありがとうございました
萩原様 匿名の皆様

【募金箱】 高原様 坂本様 白石様 埴淵様 村上様
たかだ歯科様 シャルドン様 ファミリーマート舟木町店様 ファミリーマート並木町店様
ファミリーマート天王店様 ファミリーマート別院町店様 王将阪急茨木店様



アルミ缶・牛乳パックのご提供ありがとうございました

【アルミ缶】 ハロハロ様 舟橋様 浅野様 古川様 埴淵様 ハシオダニ様 藤本様 竹内様 林様 GHピース様 作業所等へ持って来てくださった皆様
【牛乳パック】 萬谷様 ハシオダニ様 洗様 関西よつ葉連絡会淀川産地直送センター様 GHピース様 GH多歌多架様 作業所等へ持って来て下さった皆様

ご寄付をご希望いただける方は
こちらまでお願いします
<払込取扱票をご利用される場合>
口座記号番号：00930-0-212299
口座名称：社会福祉法人ぼぼんがぼん

<口座振込をご利用される場合>
銀行名：ゆうちょ銀行
金融機関コード：9900 店番：099
店名：〇九九(セトキウキウ)
預金種目：当座
口座番号：0212299
口座名称
(漢字)：社会福祉法人ぼぼんがぼん
(カナ)：フク)ポポンガポン



編集後記

2024年度がはじまる。2023年3月、新年度に向けてやり残した宿題に取り組みつつこれを書いている。私たちが障害福祉サービス事業を実施する事業者は、国の報酬改定によって大きな影響を受けるため、その情報等に注目するのだが、そのなかに「強度行動障害を有する障害者への支援体制の充実」とある。「強度行動障害」という言葉は好きではないが、考えてみれば、ぼぽんがぼんではこれまで「強度行動障害を有する障害者」の支援を多く担ってきているところではある。

知的障害のある人の重度訪問介護を使った自立生活などはまさにそのものである。が、どうも国の制度設計の文脈にはそこが抜け落ちているのではないかな。なぜか？

ぼぽんがぼんのような重度訪問介護を使った自立生活の実践をしている団体が国の政策検討の場に入っていないからではないか。

このことをしっかり反省しなければと思う。

巻頭の水野さんの取り上げた竹端先生の難解な文章から引用して今後私たちに(ぼくにか?)何が必要かを言ってみるとしよう。

私たちは「成解」を探求するという、これまで自分たちが実践してきた又していることを自覚すること。一方で「教科書の知識や専門職」的知識という「正解」を知識として持ちそれを語る力を持つこと。そのうえで、「正解」を踏まえ「成解」を説き、広く伝える力を持つこと。(ぼくの伝える力が不足して何を書いているかよくわからないとおもいます。)

こんな思いも込めて2024年度は行動援護従事者養成研修を実施予定です! (太田 吾郎)

一九九一年九月三日 第三種郵便物承認 毎月(1・2・3・5・6・8の日)発行

- 法人本部、ヘルパー派遣、グループホーム窓口、相談支援
〒567-0888 茨木市駅前 1-4-14-3F Fax 共通 072-623-9203
法人本部 Tel 072-623-9202 (9:00~18:00)
グループホーム窓口 Tel 072-623-9202 (9:00~18:00)
ヘルパー派遣 Tel 072-623-9205 (9:00~18:00)
相談支援 Tel 072-623-9210 (9:00~17:00)
- いばらき自立支援センター「ぼかぼか」(8:30~17:30)
〒567-0850 茨木市真砂玉島台 8-20 Tel 072-635-5762 Fax 072-635-5763
- いばらき自立支援センター「どかどか」(8:30~17:30)
〒567-0842 茨木市五十鈴町 7-29-1FS Tel 072-637-6882 Fax 072-637-6883
- 茨木市子ども・若者自立支援センターくろす (10:00~19:00)
〒567-0842 茨木市片桐町 4-7 Tel 080-2467-5566
- ユースプラザ center エント (10:00~19:00)
〒567-0882 大阪府茨木市元町 4-7 ローズ WAM2 階 事務室 Tel 080-1521-4624

<https://popongapon.com/>



編集人:「障害者」の生活をひろげる場「どかどか」(社会福祉法人ぼぽんがぼん)
Tel(072)623-9202(お問い合わせはこちらまで)
〒567-0888 茨木市駅前 1-4-14-3F
発行人:関西障害者定期刊行物協会
〒543-0015 大阪市天王寺区真田山町 2-2-東興ビル 4F 定価:50円

UD FONT

み 見やすいユニバーサルデザイン
フォントを採用しています。